

教育実践カウンセリングにおける テキスト分析の試み

— Q-U コンサルテーション場면을題材にして —

吉 田 直 樹

問 題

これまで、多くの中・高等学校でスクールカウンセラーを勤めた経験から、教員研修に招かれる機会が多い。そこでの肩書きは、臨床心理士であったり、カウンセラーであったり、単に助言者であったりするが、最近ではスーパーバイザー^{注)}という役割が増加したと感じる。木下(2009)は同様の経験から、「スーパービジョンが有効であることの認識が広まったためであろうか」としながらも、現在のスーパービジョンの在り方について、次のように批判している。「日本では、学校で教育活動と授業を対象とし、授業改善を目的とした教育スーパービジョンのモデルは、未だ明確には存在しないのが実情である。したがって、スーパーバイザーもまた専門的に養成されているわけではない。学校教育の経験者あるいは教育学の専門家と称される人たちがスーパーバイザーとして活動し、それぞれの理論と経験に基づいて、体系的には構築されていないスーパービジョンを主観的に実行しているのが現状である。」

教育活動領域におけるスーパービジョンの開発が遅れているにもかかわらず、スーパーバイザーの需要が高まる要因として、「楽しい学校生活を送るためのアンケート (Questionnaire-Utilities)」(以下、Q-U) が、教育現場に広く浸透してきたことも一因としてあげられる。

^{注)} 教師とは異なった専門分野を持つ臨床心理士が担当したという意味においては、「コンサルタント」が適切と思われるが、本稿では調査校で用いられていた「スーパーバイザー」とした。

Q-Uは、子どもたちの学級生活での満足感と意欲、学級集団の状態を、「いごちのよいクラスにするためのアンケート（学級満足度尺度）」と「やる気のあるクラスをつくるためのアンケート（学校生活意欲尺度）」から測定する標準化された心理テスト（河村，2007-a）であり，日本の半数以上の県や市の教育センターで実施・活用研修会が開催され教育現場に広く定着している（武蔵，2007）とされるアンケートである。

子どもの変化に伴い，教師の観察が中心であったこれまでの子ども理解から，心理テストを活用した理解へと枠組みが広がってきた。学級集団をアセスメントするには，学級内の子ども一人一人の状態，学級集団の状態像，そして学級集団の状態と個々の子どもたちとの関わりの3点を統合して捉えることが必要となり，その具体的手立てとして，Q-Uが道具として用いられた（河村，2007-b）。しかしながら，Q-Uで得られた学級集団，あるいは子どもの実体と担任教師が把握している状態に大きな違いがあることが明らかとなり，それが担任教師に大きな心理的ストレスを生じさせるという事態が発生した。河村（2007-b）は，その差異を事実として，「担任教師は，学級の中で見えている部分と見えていない部分があり，見えている部分だけで学級集団を理解しているからである。見えていないというのは，担任教師が，自分の対応が子どもたちにどのように受け取られているか，という点である。子どもたちは，担任教師が意図した対応に反応するのではなく，その教師の具体的な対応をどのように受け取ったのかによって反応するからである」と述べ，スーパービジョンを受けることによって，担任教師の思いや情報を受け入れつつ，子どもたちが担任教師の反応をどのよう受け取って反応しているのかの判断が得られると主張している。

吉田・下田・石津（2011）は，Q-Uの活用に関する実践的研究の中で，富山県でも多くの小中学校で実施されているが，その結果を十分活用しきれていない可能性があり，その原因として「教師からデータの読み取り方がわからない」，「教師自身が気になる生徒とデータの関連がわからない」といった内容の問題点が聞かれると述べている。そして，Q-Uの結果と担任教師との見立てとにズレが生じることもあることから，教師の直観的な生徒理解のみでなく，

Q-Uのデータによる生徒理解を合わせ、トータル的に生徒の実態を把握する必要を唱えている。その上で、担任教師が一人で抱え込むのではなく、学年団が同じ問題意識を持って取り組むという提案がなされているが、さらに求められるのは、同じ教師集団の視点ではなく、教師の思いを受け取りつつも教師が見えにくい部分をアセスメントから分析し、その上で具体的な対応を教師とのカウンセリングを通して一緒に検討していく教育スーパーバイザー（コンサルタント）の存在であろう。

そこで本研究では、Q-Uコンサルテーション場面における対教師カウンセリングのテキスト分析を通して、効果的なスーパービジョン（コンサルテーション）を展開する上での視点の抽出について検討した。

方 法

対象：三重県内の中学校クラス担任教員14名（1年5名、2年4名、3年5名）を調査対象とした。

調査期間：20xx年5月～12月であった。

調査手続き：20xx年5月に第1回目のhyperQ-Uを全校実施した。その結果をもとに学級集団の状態を「まとまりのある集団」、「かたさの見られる集団」、「ゆるみが見られる集団」、「荒れ始めの（荒れた）集団」の4群に分類したところ、「かたさの見られる集団」が全校14クラスのうち9クラスを占めたため、学級集団の状態を「（親和的な）まとまりのある集団」へと導くことを目標に定め学校全体で取り組みを始めた。その取り組みをサポートする活動の一環として、学級経営のスーパービジョンを進めていく前提に担任教師へのカウンセリングが不可欠である（河村、2007-b）とされることから、担任教師に対して個別カウンセリングを随時行った。

取り組みの効果を査定するために、第2回のhyperQ-Uを20xx年12月に全校実施した。

なお、「かたさの見られる集団」とは、学習意欲・活動量に差があり、満足感の高い子どもとそうでない子どもの二極化が起こっている。失敗を恐れ発言ができない子、あるいは発言する子が限られ、考えの交流が難しい。子ども同士

の認め合いが少なく人間関係が希薄。静かに授業は展開するが、教師の指導に対して受身で学習課題に積極的に向き合っていない（島根県教育庁義務教育課，2011）といった特徴を持つ学級状態を示す。

一方、「まとまりのある集団」とは、授業に取り組むルールが確立されており、指示をしなくても活動を進めることができる。子どもたちの集中力が高く、活気がある。安心して自己表現をすることができるので、子どもたちの発言が多い。考えを交流するなど学び合いができる。多様な形態で学習することができ、応用・発展的な活動に取り組む（島根県教育庁義務教育課，2011）ことのできる学級集団である。

結果と考察

本稿では、スーパービジョンにあたっての指針を抽出する試みとして、教員からQ-Uの結果に対する認識やクラスに対する現状把握、思いなどを自由に語ってもらう機会として設けた個別カウンセリングセッションでの発言を分析した。

まず、第1回のQ-Uにおいて学級集団の状態が「かたさの見られる集団」であった9クラス（1年4クラス，2年3クラス，3年2クラス）について、第2回Q-Uの結果，目標通り「まとまりのある集団」へと変化した群（3クラス），変化が認められなかった群（4クラス），意図とは異なり「ゆるみの見られる集団」へと変化した群（2クラス）に分類した。

次に、カウンセリングセッションで担任教師の発話をテキスト型データにし、それぞれの群ごとにSPSS Text Analytics for Surveys version 3を用いて解析した。

解析対象の構成要素を抽出するために、藤井（2003）・李（2005）を参考に、人名・地名・組織名などを除き、例えば「クラブ」を「部活」に置換するなど、同種の語を1つの語に置き換えた。カテゴリーの作成は、山西（2010）を参考に頻度ベース閾値3以上を対象とした。

「かたさの見られる集団」から「まとまりのある集団」へと変化した群（改善群）について

Fig.1 に示したように、改善群では、自分と仲間との人間関係を考えさせることと、他の生徒の気持ちを考えた上での責任意識を育てるリーダーシップに加え、リーダーの気持ちを支援するフォロワーシップを育てることという学級経営方針が、一体感を持って取り組む機会を中心に関連づけられているため、生徒が認知しやすいシンプルなネットワーク構造になっている。その結果、学級集団としての親和性が醸成され、かたさの見られる集団からまとまりのある良好な集団への改善が導かれたと考えられる。

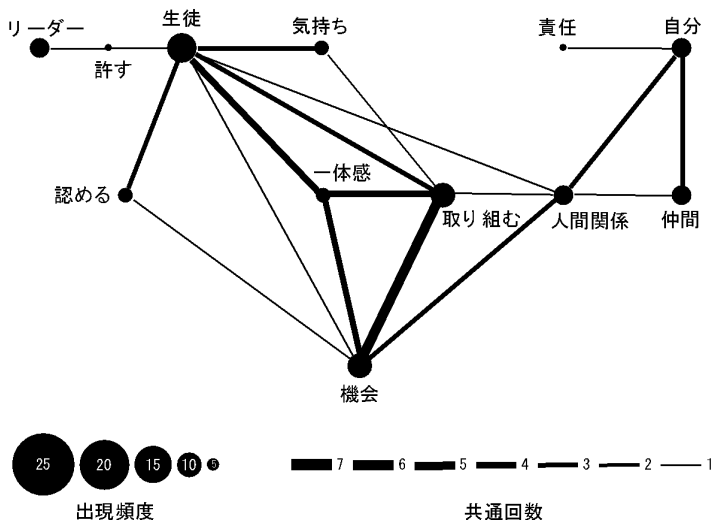


Fig. 1 改善群のキーワードネットワーク

「かたさの見られる集団」のままであった群（緊張群）について

一方、かたさが改善されず緊張が残ったままのクラス集団では、キーワードの複雑なネットワーク構造が示された (Fig. 2)。グループエンカウンターを取り入れたり、生徒同士が認め合う機会を設けたり、学活で発言を増やそうとしてみたり、交換ノートを導入したりと、生徒を認めることを軸に様々なアイデ

アを試みているが、一貫性や継続性が感じられず、単発のイベント化してしまっている様子がうかがえる。また、イベントが重なり合うことによって教師の意図が輻輳し、生徒は活動の意味を把握できずに教師の顔色をうかがうため緊張感が解けないのではないか。

また、生徒にはルールを守りまじめに取り組む姿勢を求めていることから、基本的な生活態度を身につけさせようとする厳しい指導の結果、生徒は息苦しさを感じたり学級での存在感に階層が生じ、一見整然と生活しているように見えても、実は学校生活の喜びや学習の楽しさを体験することが難しく（河村, 2012）、かたさが持続してしまっただのではないかと考えられる。

緊張群では、一斉指導による管理的な生活指導ではなく、学級での存在感の個人差を解消する個別指導へと、教師のアプローチを移行させることがスーパーバイズを中心とされるべきであろう。

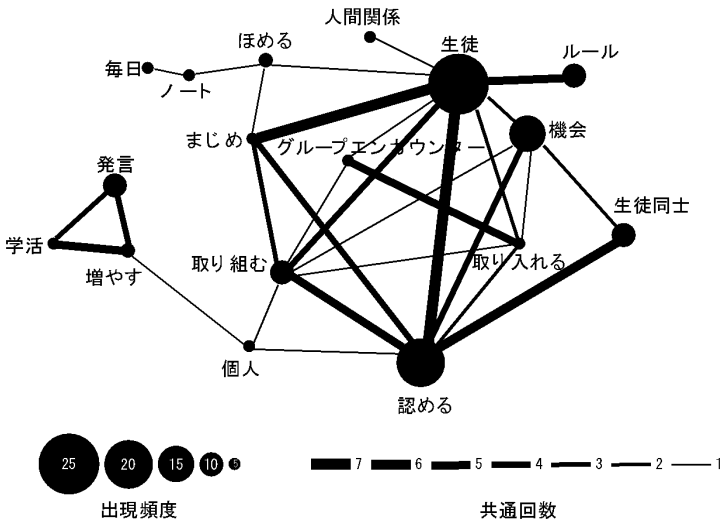


Fig. 2 緊張群のキーワードネットワーク

「かたさの見られる集団」から「ゆるみの見られる集団」へと変化した群（弛緩群）について

「ゆるみの見られる集団」とは、授業展開のルールが確立されず、なれ合いの状態が生まれやすいため、学習意欲や活動量が低下する。子ども同士が小グループで固まり、全体としての活動が展開しにくい。人の意見が聞けなかったり、冷やかしが多くなったり、特定の子やグループが自己中心的な発言をする。一見活動的に授業は展開するが、場当たりの活動になりがちで学習が深まらず、学習課題にせまることができない（鳥根県教育庁義務教育課，2011）といった特徴を示す学級集団である。

弛緩群では、人間関係を形成するために生徒と話しほめて認める機会と、生徒同士の出会い直しを目的としたグループエンカウンターを設けているが、両者の橋渡しとなる取り組みがなされていない（Fig. 3）。教師は働きかけを提供するだけで生徒への関与が乏しく、かたさを意識しすぎてリーダーシップを控えたことから、その後の展開を生徒に預ける放任的な学級経営に至ってしまった。その結果、理想とする学級集団の状態が曖昧となり、まじめに取り組む生徒の活動意欲まで低下して緩みが生じたと考えられる。

生徒の安易な思いや言動を見過ごすのではなく、やるべきことの具体的なイメージを提示し、教師が生徒と一緒に確実に実行するという姿勢の再認識がスーパービジョンの指針とされるべきであろう。

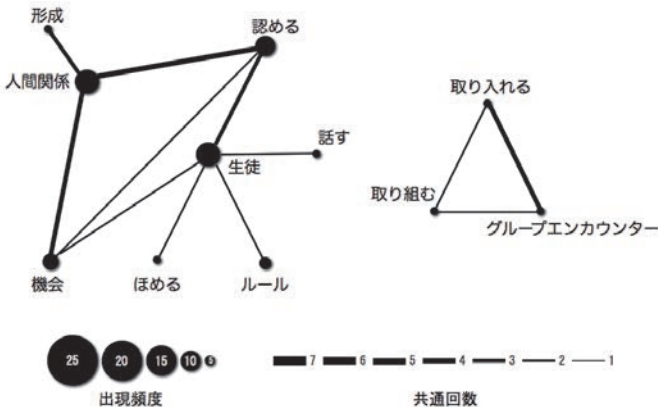


Fig. 3 弛緩群のキーワードネットワーク

ま と め

以上のように、学級集団の状態が改善されないのは、担任教師の働きかけが複雑であったり構造化されていないために生徒に受け入れられない場合か、意図が生徒に伝わっていない場合であることが示唆された。そして教師の関心は働きかけの機会を設定することに偏り、生徒たちの認知に気づいていないことが発話内容から読み取れた。

学級集団の状態に照らして、担任教師が見えていなかった部分を一緒に確認し、その上で具体的対応方法を担任教師と決めていくことがスーパービジョンの第一歩である(河村, 2007-b)。そして、教師にとって有効かつ期待されるサポートとは、一般論や精神論ではなく教育実践に直結するような具体的な課題の指摘である。

カウンセリング場面における教師の「生の声」を定量的に解析することによって、学級経営の問題点に潜む課題を抽出するといった分析手法は、教師に気づきを与えるという点でスーパーバイズの本質であり、そこから解決のストラテジーを示し具現化していくことがスーパーバイザー(コンサルタント)の役割である。

文 献

- 藤井美和 2003 大学生のもつ「死」のイメージ：テキストマイニングによる分析，関西学院大学社会学部紀要，95，145-155.
- 河村茂雄 2007-a 学級づくりのためのQ-U入門，図書文化.
- 河村茂雄 2007-b スーパービジョンの展開，河村茂雄・小野寺正己・粕谷貴志・武蔵由佳・NPO 日本教育カウンセラー協会(編) Q-Uによる学級経営スーパーバイズ・ガイド，11-26，図書文化.
- 河村茂雄 2012 学級集団づくりのゼロ段階，図書文化.
- 木下百合子 2009 教育スーパービジョンの養成コンセプト：教育スーパービジョンキールモデルにおける養成モジュール，大阪教育大学教科教育学論集，8，51-60.

- 李政元 2005 「茶釜」と Excel を使って多変量解析用データをつくる, 藤井美和・小杉考司・李政元 (編著) 福祉・心理・看護のテキストマイニング入門, 76-93. 中央法規
- 武蔵由佳 2007 Q-U (Questionnaire-Utilities) の概略, 河村茂雄・小野寺正己・粕谷貴志・武蔵由佳・NPO 日本教育カウンセラー協会 (編) Q-U による学級経営スーパーバイズ・ガイド, 8-10, 図書文化.
- 島根県教育庁義務教育課 2011 指導のポイント: 授業づくりの参考に, 島根県.
- 山西博之 2010 教育・研究のための自由記述アンケートデータ分析入門: SPSS Text Analytics for Surveys を用いて, 関西支部メソドロジー研究会2010年度報告論集, 110-124.
- 吉田圭吾・下田芳幸・石津憲一郎 2011 中学生を対象としたQ-Uの活用に関する実践的研究: 教員の意識調査およびQ-Uのデータ分析から, 富山大学人間発達科学研究実践総合センター紀要, 教育実践研究, 6, 131-136.